

「光のたとえ」

ルカの福音書 11:33~36

はじめに

今日の内容は光についてのメッセージとなっています。ヘブル語でこの光のことをオール(אור)といいます。それはヘブル語の第一の文字であり神ご自身を直接的に指し示す文字であるアーレフ(א)、そして貼り付ける、据えるための釘を象った文字ヴァーヴ(ו)、また人が考え、その全身に指令を出すための器官である頭、頭脳を意味するレーシュ(ר)という三つの文字が組み合わさった言葉となっており、つまりオールには「神が初めにお定めになった考え、命令」すなわち必ず成し遂げられる「神のご計画」という意味が秘められているのです。また頭を意味するレーシュを全被造物の頭、支配者である王と解釈するならば「神が定められた王、主は王である」という意味にもなり、それはもちろん王の王、主の主であられるイエシュアを指し示すものとなります。ですからオール「光」とは本来、日光や灯のような単に見るための明かりという意味の言葉ではなく、神が何を目指し、何を実現させようとしておられるのかということを示し、それを成し遂げられる唯一の御方であるイエシュアを、そして今はまだ見えない未来の出来事をまさに見えるようにするためのものなのです。そのような意味、隠された奥義として今日の箇所に記されたイエシュアのたとえ、御言葉を読み解いてまいりたいと思います。聖霊の助けがありますように。

1. 燭台の上

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:33 だれも、明かりをともして、それを穴蔵の中や升の下に置く者はいません。燭台の上に置きます。入って来た人たちに、その光が見えるようにするためです。

ここから「明かり」すなわち「光」についてのイエシュアのたとえ話が始まります。まずこの「光」は「燭台の上に」置くべきものであるとイエシュアは言われました。「燭台」はメノーラー(מְנוֹרָה)といい、本来は幕屋または神殿の中核、聖所の中にあり、その内部を照らすためのものです。窓や隙間のない聖所にとってメノーラーの明かりは唯一の光であり、まずこれに火が灯されることによって「入って来た人たち」すなわちイスラエルの祭司たちは聖所で仕えることができたのです。つまりこのメノーラー「燭台」にまず「明かり」が灯され、その上に「光」が置かれなければ、イスラエルの祭司たちは聖所で仕えることはおろか、見ることもできないということです。ではこのたとえにおける「燭台」メノーラーとは一体何を表しているのでしょうか。ヨハネの黙示録にこうあります。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

1:17 この方を見たとき、私は死んだ者のように、その足もとに倒れ込んだ。すると、その方は私の上に右手を置いて言われた。「恐れることはない。わたしは初めであり、終わりであり、

1:18 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とよみの鍵を持っている。

1:19 それゆえ、あなたが見たこと、今あること、この後起ころうとしていることを書き記せ。

1:20 あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台の、秘められた意味について。七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。

これは「わたしは初めてであり、終わりであり」と言われる御方、すなわち主イエシュアご自身が筆者ヨハネにまぼろしを見せ、その意味を説き明かされたという記述です。ここでイエシュアは「七つの燭台は七つの教会である」と説かれ、これが私たち教会を指し示していることが明言されています。事実、見た目にもメノーラーは図のように上部に七つの灯皿がついており、一台で七つの明かりを灯すことができるように作られているものを指します（出エジプト 25:37）。この「七」という数は神の御業、ご計画の完成、完了を指し示す数ですからメノーラーは私たち教会が完成された姿をたとえたものであり、その上すなわち「燭台の上」に置かれる「光」とは、もちろん私たちの主、メシアであるイエシュアであり、その霊である御霊、聖霊です。この光を置かれた燭台が指し示す、イエシュアと、完成された、すなわち復活の身体を得た教会が組み合わされる出来事、そのような神のご計画、それはもちろん以下の預言の成就です。



I コリント人への手紙【新改訳 2017】

15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

15:53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。

15:54 そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。「死は勝利に呑み込まれた。」

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

ちなみにメノーラーはアーモンドの花を模した装飾が施されており（出エジプト 25:33~34）このアーモンドを意味するヘブル語のシャーケード(שָׂרָקֶד)には「眠らない、目覚めている」という意味もあり、復活とは眠っている者がまさに目覚める出来事です。このような復活、そして「空中で主と会う」とい

う出来事が私たち教会のうえに成就する時を指し示してイエシュアは「**明かりをともして…燭台の上に置きます。**」と言われたのです。

そして先ほども述べたように、イスラエルの祭司たちはまずメノーラーに明かりが灯されない限り、聖所で仕えることはできません。これはつまり、まず復活、携挙によって私たち教会が完成され、それから「**入って来た人たちに、その光が見えるようにする**」すなわち神に選ばれたアブラハムの子孫であるイスラエルの民が祭司の王国として回復し、メシアであるイエシュアに仕えるようになる、という神のご計画が、その完成がここにはたとえられているのです。ちなみにこのメノーラーの作成に際してのこのような指示があります。

出エジプト記【新改訳 2017】

25:37 また、ともしび皿を七つ作る。ともしび皿は、その前方を照らすように上にあげる。

ここで「**前方**」と訳されているエーヴェル(עֲוֵל)は、イスラエル人の別称ヘブル人を意味するイヴリー(עִבְרִי)と同じ綴りの言葉です。つまり七つのともしび皿であるメノーラーは「イスラエルの民を照らし、上に上げられる」とも解釈でき、ここにも教会が上げられ、携挙され、イスラエルの前にこれが表される明らかにされる、という神のご計画の奥義があることがわかります。これこそがまさしくオール、すなわち初めに神が定められたご計画というわけなのです。

2. 光のからだ

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:34 からだの明かりは目です。あなたの目が健やかなら全身も明るくなりますが、目が悪いと、からだも暗くなります。

11:35 ですから、自分のうちの光が闇にならないように気をつけなさい。

11:36 もし、あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら、明かりがその輝きであなたを照らすときのように、全身が光に満ちたものとなります。」

次にイエシュアは燭台の上の明かりをここでは「**からだの…目**」にたとえておられます。ですから「**からだ**」は私たち教会を指しており、そして「**目**」はもちろんイエシュアです。今の私たちはの目は残念ながらまだイエシュアとはなっていません。そのため「**からだも暗くなります**」とあるように、やがて私たちの肉体は朽ちて死んでしまいます。しかしやがて主イエシュアが来られ、私たちの目、光と変わってくださいます。その時私たちのこの「**からだ**」はよみがえり、永遠に「**全身が光に満ちたもの**」と変えられるのです。

ちなみにこの「**からだ**」を意味するヘブル語のガフ(גוף)は本来「**独身**」と訳され、奴隷から解放されるヘブル人の奴隷を指し示す言葉です。

出エジプト記【新改訳 2017】

21:2 あなたがヘブル人の男奴隷を買う場合、その人は六年間仕えなければならない。しかし七年目には自由の身として無償で去ることができる。

21:3 彼が独身で来たのなら独身で去る。

これは主がモーセを通してイスラエルに定められた律法の一つで、異邦人ではなく同胞を奴隷とした場合、「七年目には自由の身として無償で去ることができる」、すなわち奴隷となったイスラエル人は必ず七年で解放されるというものです。預言者ダニエルの書に記された、世の終わりの最後の一週（ダニエル 9:27）それは三年半の大患難時代を含む「七年間」のことです。イスラエルの民は獣と呼ばれる反キリストと七年間の契約を結び、そのため大きな患難を通らされます。しかしその終わり、すなわち「七年目には」地上再臨される主イエシュア・メシアによって救い出され、まさに「自由の身として無償で去ることができる」という神のご計画が成就します。それがこの「独身」と訳された「からだ」ガフに秘められた神のご計画なのです。このたとえにあるように、神のご計画は目を健やかにすることではありません。「からだ」が、「全身が光に満ちたものと」なることです。それはすなわち私たち教会に復活の身体、朽ちない身体を与え、そしてイスラエルを悪魔の手から救い出し、その奴隷から解放することです。今日のたとえにはこのようにイスラエルと教会に対する大きく二つの神のご計画の奥義が指し示されているのです。

3. うちの光

ですからイエシュアは言われます。「自分のうちの光が闇にならないように気をつけなさい」と。たしかにイエシュアはまだ私たちの「からだの…目」とはなっておらず、復活の時、携挙はまだ来ていません。しかしすでに神は私たちのうちに、私たちの中に「光」を与えておられます。それはもちろんオールの光であり、神が初めにお定めになったご計画としての光です。今日私は皆さんのうちにこれを受け取っていただきたいと願っています。アブラハムの妻サラは初め神のご計画を聞きましたが、彼女のうちでこれをあざ笑い、信じませんでした。その結果、彼女は神が恐ろしくなったとあります（創世記 18:15）。このように、神のご計画を否定し、これを受け取らない者は恐れにとらわれます。今日述べたように、神は私たち教会に、そしてイスラエルにとっての良い計画をお持ちなのです。これを信じないなら、受け入れないなら、ただでさえ目の見えない状態の私たちがこのうちに宿る光も見ようとしなければ、あとは暗闇しかなく、恐れにとられるのは当然です。どうかこのうちにある光を決して見失わないように、誰にも奪われることがありませんように。「気をつけなさい」と、主イエシュアの御名によって勧め、また命じ、何より主が私たち一人ひとりにお与えくださるこの良い知らせ、福音を主ご自身が御霊によってお守りくださるようにと祈ります。